私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。
公益財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritages

季刊 みる・きく・ふれる 文化財

おうみ文化財通信 vol. 42

Information of Cultural Heritage in OHMI

2020 Winter

【調査速報】「琴柱」に文字？川跡から出土 －栗東市上砥山遺跡－
【調査速報】橋台遺構の発見 －彦根市佐和山城跡－
【展示案内】「安土・桃山時代の近江展－琵琶湖文化館収蔵品を中心に－」
【資料紹介】「檜図屏風 海北友松筆」

【調査速報】

「琴柱（ことじ）」に文字？川跡から出土

－栗東市（りっとうし） 上砥山遺跡（かみとやまいせき）－

川跡から見つかった琴柱（上が弦を張る部分）　（写真：滋賀県教育委員会 提供）

上砥山遺跡は栗東市北部に位置し、丘陵と金勝（こんぜ）川に挟まれた比較的狭小な平野部に立地しています。平成三十年度から実施された調査によって、掘立柱建物１棟と川跡が見つかりました。掘立柱建物は桁行（けたゆき）３間、梁行（はりゆき）２間の建物で、柱跡から見つかった土器によって奈良時代に取り壊されたものと考えられます。川跡からは、飛鳥時代～奈良時代（７世紀後半～８世紀前半）にかけての土器や木製品が大量に出土しました。これらは出土した遺物の大半を占めます。堆積の状況から、当時は緩やかな流れの川であったと推測されます。川跡の北西部に土器が集中して出土したことから、人々の活動していた地域は、今回見つかった川跡からみて北西の丘陵裾部に展開されていたと考えられます。

栗東市上砥山遺跡　一般国道１号バイパスに伴う発掘調査

◆祭祀の道具＜琴柱・土馬＞

出土品の中で、注目されるものは土馬（どば）と琴柱（ことじ）です。土馬は馬の形を模した土製品です。出土したものは、たてがみが線によって表現され、胴体背部には粘土の貼り付け跡が見られることから鞍を模した装飾が存在したと考えられます。琴柱は琴の弦を支えるために用いられる木製品で、２点出土しました。そのうち１点は不要となった木簡を作り変えたものと考えられ、表面には「道」とみられる文字を含む三字が確認されます。このような木簡を転用した琴柱の出土例は全国的に希少で、この遺跡の特徴を考える一つの要素となります。

土馬や琴柱は一般的に祭祀の道具として用いられたと考えられています。土馬は水の神様や道の神様に対する供物の代用品として用いられるとされており、多くは今回の事例のような川や道路上から見つかります。琴柱は琴に必要な部品の一つであり、琴柱のみで楽器として使用することは出来ません。しかし、全国の遺跡では琴本体は見つからないものの、琴柱のみが見つかるという事例は多数あります。なぜ、このような事例が散見されるかについては諸説あります。琴は板材として転用が出来るが、琴柱はこれ以上微細に転用できないためにそのまま廃棄されたという説や、琴柱自体が琴の代用品として祭祀の道具としてみなされて使用されたという説などです。いずれにしても、琴柱は楽器の琴としての祭祀的要素を含んでおり、先述の土馬と合わせてこの遺跡周辺で何らかの祭祀が行われていたことが想定できます。

◆文字関連資料＜中空円面硯・墨書土器＞

文字が書かれた土器や、食器を硯として使用した転用硯、特殊な形をした中空円面硯（ちゅうくうえんめんけん）が出土したことも特徴のひとつとして挙げられます。文字が書かれた道具や文字を書くための道具が出土していることは、この遺跡周辺に識字が出来る人々がいたと考えられます。奈良時代では一定以上の地位を持った人々から識字が出来たと考えられるため、これらは上砥山周辺に官衙などの公的機関、または地域の有力者がいた可能性を示しています。

◆調査成果のまとめ

調査成果から、遺跡周辺では飛鳥時代から奈良時代にかけて人々が活動していたことがわかりました。特に奈良時代には木簡を使用し、硯を用いる一定以上の地位を持った人々が居て祭祀を行っていたと考えられます。

これらの調査成果を元に、令和元年 10 月 26 日に行われた現地説明会では、70 名を超える多くの方々にご参加いただきました。

胴体部と足が一本残った状態で見つかった土馬

硯の一種である中空円面硯

土器外面側部に「太」と書かれた須恵器

（写真：滋賀県教育委員会 提供）

上砥山遺跡

彦根市佐和山城跡　一般国道８号米原バイパス工事に伴う発掘調査

◆橋台（きょうだい）遺構の発見

佐和山城跡では平成 30 年度から発掘調査を実施し城下町に関連する成果が得られています。今年度の調査でも 16 世紀終わりごろの城下町に関連する遺構が検出され、それらに伴い様々な遺物が出土しています。検出遺構の中で特に注目されるのは、石積みによって築かれた橋台遺構です。

◆石積みによって築かれた橋台遺構

推定「本町筋」から西に約 50mの地点で、城下町の中央付近を南北に走る幅約2.6mの溝が見つかりました。その東西両岸の一部が幅約 5mにわたって掘り広げられており、石積みが築かれていました。

石積みは幅 0.3 ～ 0.5m、高さ 0.2 ～ 0.3m、奥行き 0.3 ～ 0.4m程度の築石（つきいし）を最大３段積み上げ、背面には拳大～人頭大の栗石（ぐりいし）が詰められていました。石材の大半は佐和山丘陵で産出するチャートと呼ばれる石材です。また石積みは溝の内側に向けて崩されている状況を確認することができました。溝の内側に落ち込んでいた石材の数量から推定するに、おそらく本来はもう１・２段積まれていたものと思われます。

この石積みは溝の一部にのみ設けられ、護岸施設とは考え難いことから、溝を渡るために架けられた橋の台座（橋台）の遺構と考えられます。

◆城下町と城内をつなぐ東西道路

石積みの部分に橋が架けられていたとすれば、橋の延長線上に道路の存在が推定できます。道路の側溝や路面の確認はできていないものの、石積みの東西両側には遺構の分布が希薄な部分が広がっており、この空間には東西方向の道路が敷かれていたとみられます。東西道路を東に約 50m延長すると「本町筋」と接続し、西に約 50m延長すると内堀に突き当たり、それを越えると城内（武家屋敷地）に至ります。こうしたことから、東西道路は城下町のメインストリートである「本町筋」と城内とを結ぶ重要な道路であったと推定されます。ちなみに、江戸時代に描かれた佐和山城の絵図には、おおよそ今回の調査地点から内堀へと向かっていった先に「門跡」の記載があります。東西道路はこの門へと続いていたのかもしれません。

橋台遺構が見つかった調査地　写真中央付近に南北方向の溝・橋台遺構が見えます。周辺では掘立柱建物や石組井戸などが見つかりました。

石積みによって築かれた橋台と東西道路　黄色のトーンをかけた部分が道路があったと考えられる空間です。道路幅は最大で5m近くあったと推定されます。

石積み（西岸部分）の構造　粗割りした自然石を積み上げて構築されています。基底部は溝の底面よりも深く掘り下げて根石（ねいし）を入れた状況を確認できました。

（写真：滋賀県教育委員会 提供）

QR コードを読み込んでいただくと、協会 HP 内の現地説明会資料をご覧いただけます。

佐和山城跡

おうみ文化財通信 vol.42
Information of Cultural Heritage in OHMI
◆令和２年１月１日刊行／編集・発行：公益財団法人滋賀県文化財保護協会／〒520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町 1732-2／電話：077-548-9780／FAX：077-543-1525
イラスト：早田まな（しじみちゃん・まめのぶくん）・琵琶湖文化館（あきつ君）

滋賀県立琵琶湖文化館・滋賀県立安土城考古博物館連携企画展
滋賀県立安土城考古博物館　第 61 回企画展

「安土・桃山時代の近江展－琵琶湖文化館収蔵品を中心に－」

文化財の宝庫である滋賀県。本県に伝来した文化財を多数収蔵している琵琶湖文化館は、滋賀の歴史と文化を語るうえで欠かすことのできない存在です。現在は休館している琵琶湖文化館の収蔵品のなかから、安土・桃山時代の優品にスポットをあててご紹介いたします。

草津市指定文化財　秋草蒔絵湯桶
草津市 観音寺蔵
滋賀県立琵琶湖文化館寄託

草津市指定文化財　王会図屏風（部分）
草津市 観音寺蔵
滋賀県立琵琶湖文化館寄託

【開催期間】**令和２年２月８日（土）～４月５日（日）**
【開館時間】午前 9 時～午後 5 時（入館は午後 4 時 30 分まで）
【休 館 日】月曜日（月曜日が祝日・振替休日の場合は翌日）
【入 館 料】大人 600 円、高大生 360 円、小中学生無料

《企画展関連博物館講座》
①令和 2 年 2 月 16 日　（ 日 ）　「近江の明智光秀文書および安土宗論について」
講師：井上 優氏（滋賀県教育委員会）
②令和 2 年 2 月 23 日（日・祝）「桃山時代の工芸品」
講師：古川 史隆氏（滋賀県教育委員会）
※安土城考古博物館 NPS セミナールーム　定員 140 名（先着順）
午後 1 時 30 分～ 3 時（受付は午後 1 時～）　参加費 200 円

滋賀県立安土城考古博物館
〒521-1311 滋賀県近江八幡市安土町下豊浦 6678
TEL. 0748-46-2424　FAX. 0748-46-6140
URL：http://www.azuchi-museum.or.jp/

博物館ＨＰはこちら

琵琶湖文化館資料紹介

「檜図屏風　海北友松筆」

檜図屏風　海北友松筆　六曲一隻
縦 155.0cm　横 354.0cm
滋賀県立琵琶湖文化館蔵

滋賀県立琵琶湖文化館
〒520-0806 滋賀県大津市打出浜地先
TEL. 077-522-8179　FAX. 077-522-9634
E-mail：biwakobunkakan@yacht.ocn.ne.jp
URL：http://www.biwakobunkakan.jp/

海北友松（かいほう　ゆうしょう：1533 ～ 1615）は、狩野永徳、長谷川等伯と並び称される、安土・桃山時代を代表する画家です。戦国大名浅井氏の重臣であった湖北の名門海北家に生まれた友松は、3 歳で京都の東福寺に入り、そこで画才を見出され狩野派に師事します。画家としては遅咲きで、狩野派を離れてのち 60 代半ばに達してから、建仁寺の塔頭や本坊大方丈に水墨障壁画の大作を次々と完成させ、一躍世に名を馳せます。さらに、70 歳を超えてからも、新たに桃山絵画の華と称される金碧画に取り組み、自らの新境地を開いていきました。

『檜図屏風』は、画風や落款から慶長 7 年 (1602) 頃の作と考えられ、友松の金碧画としてはもっとも早い時期のものです。画面向って右方に幹をまっすぐに伸ばした檜の林、中央には若木の群生、そして向かって左下には湖水のような水辺が描かれる簡潔な構図ですが、金地の背景の一部が檜の前後にぼんやりとした金雲となって回り込み、絵に奥行きを作り出しています。画面全体を支配する力強さや大らかさは、刀を絵筆に持ち替えても抱き続けた、武士の魂が滲み出たものなのでしょうか。

本作品は、滋賀県立安土城考古博物館との連携企画展「安土・桃山時代の近江展－琵琶湖文化館収蔵品を中心に－」に出陳します。ぜひこの機会にご鑑賞ください。

●本誌の掲載情報は令和２年１月１日現在の情報です。諸般の事情により内容が変更される場合がございますので、お出かけの際はご確認下さい。